

特定非営利活動法人 日本高山植物保護協会

初代会長 故白簷史朗氏 追悼文集

(名前アイウエオ順敬称略)

「白簷史朗前会長を偲ぶ」

天野 憲治

白簷史朗先生は、昭和8年2月23日、大月市生まれです。そして、終戦二日前の大月空襲を体験し、中学校を卒業後、師・岡田紅陽に弟子入りして山岳写真家を目指された。

昭和62年には、山梨県文化功労者表彰。平成3年大月市郷土資料館に「白簷史朗写真館」を併設など、ふるさと大月市の発展にも大きく寄与された。そんな中、突然白簷先生の訃報が伝えられた。2019年11月30日午後10時30分、肺炎、腎不全のため、静岡県伊豆の国市順天堂大附属病院で逝去された。(享年86歳)

2020年5月25日井ノ部康之著「白嶺の金剛夜叉、山岳写真家白簷史朗」が楳山と溪谷社から発行されているので、その一部を紹介したい。

白簷が山に正対する時、三面どころか四方八方、頭上足下に五つの眼にも匹敵する鋭い視線を走らせ、六本はないが、両手と十本の指を六通り以上に駆使し、三脚を据え、カメラを固定し、レンズを交換し、フィルムを装填し、ファインダーをのぞき、シャッターを切る。

それはまさに金剛夜叉明王の姿そのものだ。金剛夜叉明王が手にしている六つの武器を、カメラ、フィルム、登山靴、ピッケル、冬山用防寒服、それに……酒の六つに替えれば、これはもう白簷の手になじんだ「武器」そのものといっていい。(本文より)

白簷先生は、大月に帰った時は、大月市役所の職員、吉角努、井上初、天野憲治の三名を「下り酒があるから一献しよう」と自宅に呼んで、山男の手料理で御馳走してくれたのです。下り酒についての話を聞いたり、ネパールなど海外の食べ物や活動などを親しく話してくれました。

先生の父は、山形県の出身。母は、都留市尾形山の出身。酒がしっかり入ってくると「父の山は、鳥海山」、
「母の山は、高川山」と話すことも何回かありました。大月駅前の飲み屋で一献した時は、母の位牌をテーブルの上に置き、まるで母も一緒であるかのように飲む先生の姿に感銘を受けました。親を思う気持ちは、計り知れないものだと思います。スナックで歌うことも多く、シャンソンや演歌も上手に歌います。今も色紙がスナックにあります。

♪へたな歌 唄うふるさとの夜♪ 白簷史朗

山梨県(当時の知事は、望月幸明)は全国に先駆けて高山植物保護条例を制定した。

一献の席でよく聞きました。「山梨県には全国に先駆けるようなものはあまりない」と望月知事に敬意を表しました。白簷先生が「日本高山植物保護協会」の会長となり、市役所の職員であった私ら三名も入会した。

白簷先生は、2月23日が誕生日です。語呂合わせで「ふじさん」です。天皇誕生日も2月23日です。当時皇太子であった陛下と親交があり、陛下の誕生日お祝いができなかったことを一番無念に思っているのは、白簷史朗先生だ。

諸行無常 合掌



20年ほど前に中央アルプスをバックに

「白簾先生、ありがとうございました」

伊藤 恵子

私が初めて白簾先生にお会いしたのは1978年、先生のヨーロッパ・アルプスの写真展の会場でした。当時友人が“山岳写真の会「白い峰」”の会員で山と写真に興味を持っていた私を誘ってくれたのです。その友人の最初の言葉は「会場の入り口にいる赤鬼のような人が先生だから・・・」

赤鬼のような、って、いったいどんな人なんだろうと恐る恐るお会いしたのが最初でした。それがきっかけで「白い峰」に入会したのですが、いつだったか忘れてましたが、先生の写真集の出版記念パーティーにその友人が赤鬼のぬいぐるみ(?)を先生にプレゼント、先生も大変気に入られ、その後カメラと酒瓶をぶら下げた赤鬼が先生のトレードマークになり、Tシャツやマスコット、ストラップとして南アルプスの山小屋や尾瀬の写真館などで販売されました。



若いころの先生は高山植物には関心がなく、全ての花はミヤマシラネエソウ(知らねえ草)だった頃もあったそうです。しかし、山に咲く可憐な花に心を惹かれてからは猛勉強し、“カラー高山植物”という図鑑ともいえるような本を出版するまでにられました。

兄弟が多く戦争でお父さんの仕事がうまくいかなくなってからは弟や妹の面倒をみるために学校も中学しか出られず、写真も今でいうような写真学校に通ったわけではなく、岡田紅陽先生の家に住み込みで、写真のことを体験を通して学び、一流の写真家になった、まさに努力の人です。

とはいえ、変に偉ぶったところはなく私たちも撮影山行はじめ、あちこちに一緒に遊びに連れて行っていただきました。お酒も大好きで、「俺は酒は嫌いだ。あんな悪いものがあるってはいけないので、世の中から酒を退治するために自分の身を犠牲にして飲んでいるんだ」なんて言いながら楽しそうに飲んでいました。新宿で飲んでいて終電が無くなるからそろそろ帰ろうか、ではなく、始発が動き始めたから帰ろうか、なんていうことすらありました。

日本の山々は勿論のこと、ヨーロッパ・アルプス、ネパール、カナダなど先生と一緒にいった山々は数知れません。それとともに先生を通じてとっても多くの方々と知り合うことができたことも私の人生を豊かにしてくれました。

そんな先生がとうとう亡くなりました。まだまだ元気であっていただきたかったのに、残念でなりません。でも、いつかはこの日が来ることは仕方ありません。これからも先生の教えを心に、写真撮影や高山植物の保全活動を微力ではありますが続けていきたいと思えます。



2018.11.17大月市、お伊勢山にて最後に写真を撮られたときの近景

先生、ありがとうございました。さようならとは言いません。

「白簾史朗先生を偲ぶ」

伊藤 太一

山岳写真の会「白い峰」の庶務担当を長期間させて頂きました。主な作業は年に4回行われる写真講習会の世話役になります。富士山の部、会山行の部、自由山行の部、高山植物の部、それぞれ1位~10位、佳作が数点の作品が選考されますので、郵送便で出品された方の写真を白簾先生に見て頂いて講評文を書く作業をさせてもらいました。

作品の何処をどのようにトリミングすれば良い作品になるか!! 時間帯による光線の使い方!! 大気は常に動いて透明度も強弱で変化するのでそれを見極める事!! その他大切な事を数多く教わりました。

「白い峰」の撮影山行に同行した時などは、先生が被写体をどのように撮っているのかを知りたくなり、大

型カメラのファインダーを覗かせて貰い、風景の切り取り方など良い構図の勉強になりました。

白簾先生を通じて山小屋関係の方々とも知り合いになりました。高山植物にも興味を持ち頻りに高山に行くようになりました。それがきっかけとなり現在の希少植物保護・保全活動に繋がっています。

白簾史朗先生には大変お世話になりました。ありがとうございました。 合掌

「白簾先生、ありがとうございました」

岡野 武 司

私は、兵庫県に住んでいるために、本部の行事には、なかなか参加することは出来ませんでした。その中で、平成12～13年頃だったと思いますが、関西支部が恒例で実施している伊吹山での夏の二泊三日の観察山行に参加。一日目は、滋賀県伊吹町（現米原市）の伊吹薬草の里文化センター「ジョイ伊吹」のホールで、伊吹山の植物に詳しい先生の講演をお聞きし、その後、参加者全員で登山口に近い民宿に宿泊。白簾先生におかれましては、ご多忙にもかかわらず時刻宿泊している民宿でご一緒になり、参加者間で、懇親を深めながら夕食を取りました。二日目は、早朝から参加者全員で、伊吹山を登山。下山時に開花している高山植物を観察、撮影。またその際に登山道のゴミを拾って清掃しながら下山するというものです。下山中、先生からいろいろと花のお話をさせていただいたりしました。そして最後に民宿で全員が冷えたスイカを頬張るなど、楽しい思い出ばかりです。

現在では、伊吹山の観察山行も、大阪から貸し切りバスを利用しての日帰り観察となりました。以前のように、麓から伊吹山を登り、植物を観察することはなくなり、少し寂しくなりました。今でも、個人的に伊吹山に行った時には、懐かしく感じます。

ただ、残念なことは、伊吹山に限らずどこの山に行っても見ることですが、植物の盗掘跡を発見したり、植物保護のためロープを越えての侵入する者がいることは、非常に残念であります。

白簾先生が、出版された写真集の中には、高山植物と山の様子が写った作品が沢山あります。撮影地では、北ア、南ア、尾瀬などの国内の山で撮影されたものに限らず、海外の山で撮影されたものも沢山あります。

撮影時には、その花の特徴を生かし綺麗に撮影されたものがあるのは、改めて言うものではありませんが、いつまでもこの植物、そしてこの景色が残ってほしいと思います。

白簾先生の高山植物に対しての思いやり、自然に対しての思いやり、特に高山植物の保護に関しまして、山岳写真家という仕事を持ちながら、高山植物の保護活動にご尽力を払われたことは、改めて敬意を表したいと思います。



2010年11月19日出版記念パーティーにて

先生が他界された後、新型コロナウイルスが現れました。私たちの高山植物保護への対応や登山を含めた生活様式も大きく変わってきています。また、近年にない高温、大雨などの異常気象が続きます。保護活動に対して悪影響があり懸念されますが、精一杯の保護活動を行いたいと思いますので、どうか見守っていただきたいと思います。

最後に白簾先生、生前中は大変お世話になり、いろいろとありがとうございました。

「忘れられないネパールのこと」

齊 藤 充 男

白簾先生の「山の花抒情」「山の花繚乱」「山の花幽玄」に出ている高山植物の花々を眺めると、新型コロナの感染と茹だるような暑さの中で心が和みます。

先生には「大きな山岳と足元に咲く可憐な花。無限大から無限小までのあらゆるモチーフに表現を心がけることが、山岳写真が上手くなる道だ」と指導していただきました。

私が今でも思い出すのは、1995年11月に山岳写真の会「白い峰」で、ネパールのエベレスト街道撮影山行に参加させていただいた時のことです。いつもならシャンボチェのテント場は雪がないところですが、当時は雪が多くその奥のペリチェには行けずコースが変更されターメに行き、シェルパ族の家を訪問したりして2週間でカトマンズのエベレストホテルに戻りました。

そこで食事の時に友人と二人で先生に「高山植物の本が何冊かありましたね」と何気なく話したのですが、翌日に、先生は現地語で編纂された高山植物の本をさっそく2冊買って持っていました。先生が独学で著名な植物学者も“舌を巻く”偉大さは、世界を股にかけ、いろんな風土や歴史がある土地へ行かれ、現地での高山植物などの文献も手に入れられ研究された結果である、ことを強く感じた旅行でした



シャンボチェでシェルパとお別れ会



カトマンズ エヴェレストホテルにて

「白簾先生は不動明王」

中村光吉

よく様々な機会ご一緒出来、今でも感謝しています。先生のストレートな生き方、あり様、誰に対しても誠実でありウソが通らない生き方、……。頭の非常に良い方でしたから、少し話すだけで相手がどんな人間なのか見抜きます。ですからコチラもそのままの自分を飾ること無く接すれば良いのです。

もちろん写真家として誰もが知っている巨人でしたが、非常に優しい心と厳しさを持ち合わせ、ご自分のお母様に対しても何時も感謝の念持ち続けていたのも印象的でした。

私が山で植物の保護活動する上でのバックグラウンドは、県条例により大きな後ろ立てがあるからですが、それも白簾会長が当時の望月県知事に進言してくれて、他県に先駆けて盗掘や販売が出来なくした条例化によります。

様々な山岳会や写真の会設立の創設メンバーであり、30 - 50代当時はまださほど入ることがなかった厳冬期のヒマラヤや、日本では南アルプスでの山岳写真は秀免で、現在も他の追随をゆるさないものです。また、韓国全土の古い寺などの写真集や、日本人や日本の心を著した本、写真集100数十冊等、日本の山岳文化に貢献しています。

いまま先生が居られたらと思うことしきりですが、私達に伝えて下さった人の心のあり様は、私達がまた次の世代に伝える役割と思います。



三ツ峠山荘のリョウ君と

平成元年の日本高山植物保護協会設立時の白簾史朗氏のメッセージを遺言として

この美しいのちを後世に

この太古から生きつづけてきた小さな花々のいのちひとつ守り得ずして、何の文化国家といえよう。賛同者ひとりひとりが、大きく広やかな心で、この美しいのちを後世に伝えるよう、心から期待する。